

19世紀アメリカの黒人女性作家たち —福音伝道者の自伝の考察—

高 見 恭 子

(1)

アメリカでは19世紀に多くの女性たちが、自分たちの信仰体験を綴った自伝を書き残している。その女性たちとは、いわゆるキリスト教の福音伝道者である。当時のアメリカは拡大主義の時代であったが、その一環であるプロテスタントの改宗運動は、それまでアメリカ社会から取り残されてきた集団、すなわち、白人女性と黒人をその渦の中に巻き込んでいった。その中で活躍した女性の伝道者たちの自伝は、当時の宗教活動のダイナミズムを記録した貴重な資料であると言える。そして、さらに重要なことは、そこに描かれている女性たちの生涯は、一般社会のみならず、宗教界においても、彼女たちの前に立ちはだかっていた様々な障壁、すなわち伝統的な価値観や差別や偏見、を打ち破る闘いの連続であったことを示している点にあると言える。19世紀アメリカで展開された宗教活動は、女性に何をもたらしたのか、ここでは黒人の女性伝道者に焦点を当てながら考察してみたい。

以下に示すのは、19世紀に書かれた黒人の女性伝道者の自伝である。それらは初版されてから百数十年もの長い間省みられることはなく、歴史の闇に埋もれたままであったが、近年になってようやく光が当てられ、再販されるようになった。

Jarena Lee, *The Life and Religious Experience of Jarena Lee, A Colored Lady, Giving an Account of Her Call to Preach the Gospel* (Philadelphia: The Author, 1836).

Religious Experience and Journal of Mrs. Jarena Lee, Giving an Account of Her Call to Preach the Gospel (Philadelphia: The Author, 1849).

Zilpha Elaw, *Memoirs of the Life, Religious Experience, Ministerial Travels and Labours of Mrs. Zilpha Elaw, an American Female of Colour; Together with Some Account of the Great Religious Revivals in America* (London: The Author, 1846).

Olive Gilbert's biography, *Narrative of Sojourner Truth, A Northern Slave* (Boston: The Author, 1850).

Nancy G. Prince, *Narrative of the Life and Travels of Mrs. Nancy Prince* (Boston: The Author, 1850).

Julia A. J. Foote, *A Brand Plucked from the Fire: An Autobiographical Sketches by Mrs. Julia A. J. Foote* (Cleveland, Ohio: The Author, 1879).

Amanda Berry Smith, *An Autobiography; the Story of the Lord's Dealings With Mrs. Amanda Smith, the Colored Evangelist; Containing an Account of Her Life Work of Faith, and Her Travels in America, England, Ireland, Scotland, India and Africa, as an Independent Missionary* (Chicago: Meyer & Brother, 1893).

さて、これらの自伝は、タイトルに示されているように、作者は黒人女性で、一様に、伝道の旅を綴ったものであることが分かる。又、アマンダ・ベリー・スミス (1837-1915) の『自伝』(*An Autobiography*) を除くと、いずれも自費出版されている。ジルファ・エロー (ca. 1790-?) の『思い出の記』(*Memoirs*) は、彼女がロンドンでの五年間の布教活動を終え、帰国の途につ

く前に、世話になった人々に贈る贈呈本として自費出版されたものであるが、それ以外のほとんどは、伝道の旅を続ける資金を得るために書かれたものである。彼女たちは教会や野外集会等、行く先々でそれを手渡しで売りあるいたという。尚、サジャーナー・トゥルース (ca. 1797-1883) の『体験記』(Narrative) の著者がオリーヴ・ギルバートとなっているのは、トゥルース自身は文字の読み書きができなかったため、他の人物に口述筆記させたからである。

以下、上に上げた自伝の作者たちの背景を概略し、更に、幾つかの自伝を具体的に考察することで、19世紀アメリカの黒人女性伝道者の果たした役割を探っていくことにする。

(2)

最初に、自伝の作者たちの宗派を見ておくことにする。この中で、ジャリーナ・リー (1783-?), ジルファ・エロー, ジュリア・A・J・フート (1823-1900), アマンダ・ベリー・スミスは、いずれもメソジストである。トゥルースは神秘的な教団に入っていたようだが、ナンシー・G・プリンス (1799-?) に関しては、そのことに触れた資料を見つけることができなかった。自伝を書き残した者たちのほとんどが、なぜメソジストであったのか、興味深いところであるが、ここではあえてその事実に向けるだけに止めておく。

ところで、これら自伝の作者たちは、押し並べて優れた霊能者であり、弁術に長けたカリスマ的な伝道者であったようだ。例えば、ハリエット・ビーチャー・ストウが「リビアの巫女」(The Lybyan Sibyl)¹⁾ と称したことで、その存在が一躍全米に知られるようになったトゥルースは、非常に大柄で、純粋なアフリカ人の容姿の持ち主で、いつも頭にターバンを巻き、アフリカの衣装を身に纏っていた。彼女は黙示録の雷鳴を思わせる轟く声で、聴衆を圧倒したという。また、紐の付いたボンネットを被り、クエーカー教徒の衣装を身に付け、胸に十字架を掛けたアマンダ・ベリー・スミスは、美しい容姿と声の持ち主で、聴衆を魅了した。「歌う巡礼者」(Singing Pilgrim) と呼ばれた彼女は、黒人の

ための学校を建てる資金作りのため、フィスク大学のジュビリー・シンガーズの一員として各地を巡ったこともあった。

トゥルースとスミスを例に挙げ、黒人女性伝道者の姿の一端を紹介したが、彼女たちの生涯は、概ね自伝を通してしか知ることができないとされている。しかも、自伝は信仰体験と福音伝道に焦点が当てられており、私生活に関する記述は最小限に止められている。又、自伝発表後の生涯は、没年が分からないケースが示しているように、不明である。だが、これらの自伝は、彼女たちがどのような経緯を経て宗教活動家になっていったのか、なぜ彼女たち女性の活動家は、聖職者としてはなく、民間の伝道者として活動しなければならなかったのかという問い掛けに関しては、十分に答えてくれている。こうした点を考察していくにあたって、まずは、伝記から浮かび上がってくる彼女たちの共通項を、女性である部分と信仰者である部分の二つの側面に分け、簡単に述べておくことにする。

まず、女性としての側面を見ていくことにする。サジャーナ・トゥルースとアマンダ・ベリー・スミスは奴隷の生まれであるが（トゥルースは逃亡奴隷であり、スミスは幼いころ父親が自分を含めた家族を買い取り自由を得ている）、その他の人物、ジャリーナ・リー、ジルファ・エロー、ナンシー・G・プリンス、ジュリア・A・J・フートは自由黒人として生まれている。成人後逃亡したトゥルースは別として、これらの人物は、黒人であることからくる差別や貧困を除くと、19世紀アメリカの女性たちの生き方を踏襲していることが分かる。彼女たちの多くは七、八歳で白人家庭に家事奉公に出されている。フートのように人種差別により学校への入学を拒否され、やむなく奉公に出されたケースもあるが、概ね経済的な理由によるものである。その間、正規の学校教育を受ける機会を得ることができなかったため、彼女たちはほぼ独学で、文字の読み書きを習得している。その後、当時の年季明けは十八歳であったらしいが、十代後半で結婚し、夫の職業の都合で、親元から遠く離れた場所に移住している。ナンシー・G・プリンスの場合は、黒人女性としてというより、当時のアメリカ女性としては希有な例だと言えるが、二十五歳で結婚し、その直後、後にロ

シア皇帝の王女の召使いとなる夫と共に、ロシアに渡っている。彼女はそこで現代ギリシャ語、フランス語、英語を習い、人々の生活を生き生きと描いた見聞録を書き、ペテルスブルグでは子供の下宿屋を営んだりしたという。

結婚生活に関しても、自伝の中では必要最低限の出来事を述べるに止められているのだが、一様に、慣れない土地によるストレスや、夫の無理解から生じる精神的な葛藤に苦しみ、決して幸せなものではなかったようだ。夫たちは、奴隷制度が存続していた時代にあって、牧師、船員、商人、職人といった中産階級の自由黒人であり、豊かとは言えないまでも、大半の同胞が奴隷であった時代の黒人としては、非常に恵まれた一握りの階層に属していた。そして、彼らは当時の白人社会の厳格な家父長制度に習い、妻に対しては服従を強いていたことが伺える。そうした中、彼女たちが求める安寧が、結婚生活そのものの中にあったとは言えないようだ。その最も大きな要因は、後に述べるが、彼女たちが夫との主従関係よりも、神との主従関係を第一義としたからだと考えられる。いずれにせよ、結婚生活はあまり長く続かず、おしなべて夫や子供と死別している。幼い子供を抱えた、あるいは子供のいない寡婦となってからは、生計を立てるため、教師になったり再び奉公に出るなどして、経済的自立を果たしている。早期の結婚、多産、子供との、さらに夫との死別といった彼女たちが遭遇した一連の不幸な出来事は、当時としてはさほど珍しいものではなかったと思われる。だが、皮肉なことに、彼女たちは自分たちを襲った悲劇によって、結婚制度の束縛から開放され、自己の能力を最大限に発揮する場（信仰の世界）を獲得していくのである。余儀なくされたものとはいえ、伝統的な女性の生きかた、つまり、良き家庭人という、当時の女性に課せられた“聖なる”役割を放棄することによって、彼女たちは自己実現を果たしていくのである。

次に、信仰者としての側面を考察してみよう。彼女たちが宗教活動家となるに至るプロセスもまた一様である。いずれも、十四、五歳で最初の回心あるいは魂の覚醒（conversion）をし、その後、二十歳前後で改宗し、浸礼を受けている。回心から浸礼に至る間に、彼女たちは信仰上の様々な葛藤から、幻聴、幻視、幻夢といった形で、超自然的な宗教体験をする。そして、こうした神の

世界との交信は、彼女たちにある時決定的な瞬間をもたらす。つまり、それは、神の福音を伝える伝道者となることを、自らの使命として受け入れる瞬間である。この時を境に、彼女たちの信仰は、私的なものから社会的なものへと変化するのである。だが、彼女たちの前途には、それを阻もうとする社会の障壁が立ちはだかっていた。それは結婚制度（世俗）と教会制度（聖域）の両者に存在する女性差別であった。

(3)

ここからは、既に示した自伝の中から、ジャリーナ・リーの『人生と信仰体験』、ジルファ・エローの『思い出の記』、ジュリア・A・J・フートの『火から取り出した燃えさし』²⁾の三つの作品を取り上げ、黒人女性伝道者の辿った軌跡を、同じく彼女たちの信仰と女性としての側面に分け、具体的に考察することとする。

まずは、信仰の面から見てみよう。ジャリーナ・リーは『人生と信仰体験』の中で、メソジストの創立者、ジョン・ウェズレーの唱える「救済」(salvation)のプロセスに言及している。それによると、救済は、罪の自覚の結果生じる「悔い改め」(repentance)、キリストの贖罪によって神の恩恵を蒙り、罪を許される「義認」(justification)、完全に罪から開放され、霊的に完成された生涯を送る資格を与えられる「是認」または「清め」(sanctification)（それは精霊が宿ることによって証明される）の三段階をへて完了するという。自伝には、三人が一様にこのプロセスを辿っていったことが示されている。以下、これらの人物の個々の場合を見ていくことにする。

ジャリーナ・リーのケースから考察を始めよう。第一段階の「悔い改め」に関しては、彼女は次のように語っている。

Not long after the commencement of my attendance on this lady, she had bid me do something respecting my work, which in a little while

after, she asked me if I had done, when I replied Yes - but this was not true.

At this awful point, in my early history, the spirit of God moved in power through my conscience, and told me I was a wretched sinner.³⁾

奉公先の女主人が言いつけた仕事をしたかと尋ねた時、彼女は嘘をついて、しましたと答えてしまう。その瞬間、彼女は強烈な罪悪感に襲われるのである。こうした罪の意識は、奴隷制度の所産であるとされている。奴隷主は、主人に対して嘘をつくことは、神を偽ると同様の罪であると説き、キリスト教を利用してかれらに絶対的な服従を強いた。この場面は、その意識がジャリーナ・リーのなかにも受け継がれていることを示している。ともあれ、彼女はこの出来事によって、初めて自分が罪深い人間であることを自覚するのである。

その後、信仰に目覚めた彼女は、二十一歳の時に改宗し、ベテル・アフリカン・メソジスト・エписコパル教会⁴⁾に入っている。そのころから彼女は繰り返し「説教をせよ」と告げる神の声を聞くようになる。ある時、彼女は次のような幻夢を体験する。

... the Lord enabled me to draw nigh to him, and to his mercy seat ... there appeared a form of fire, about the size of a man's hand, as I was on my knees; at the same moment there appeared to the eyes of faith, a man robed in a white garment, from the shoulders down to the feet; from him a voice proceeded, saying: "Thou shalt never return from the cross." Since that time I had never doubted, but believe that god will keep me until the day of redemption.⁵⁾

彼女はその不思議な体験の中で、主のもとへ導かれて行くのだが、跪いた彼女の前に、人の手のような大きさの火が現れる。この火は清めの火を暗示していると思われる。そして、彼女は長いローブを纏ったキリスト（らしき人物）に

よって、「十字架から引き戻されることはない」と告げられる。こうして彼女の「義認」は達成されるのである。

ジルファ・エローの場合、「悔い改め」は、相次ぐ両親の死を自分の罪によるものだとして受け止めることから生じている。彼女の両親は敬虔なクリスチャンであったが、彼女が十二歳の時に、母親を12番目の子供のお産で亡くしている。その後、クエーカー教徒の白人家庭に奉公に出されるが、相次いで父親も亡くす。彼女は悲しみと孤独の中で、ひたすら神の許しを求め続ける。次に示すのは、幻視体験によって、彼女に「義認」の瞬間が訪れた時の記述である。

... my prayer was daily for the Lord to assure me of the forgiveness of my sins; and I at length proved the verification of the promise, "They that seek shall find" [Luke 11:9]; for, one evening, whilst singing one of the songs of Zion, I distinctly saw the Lord Jesus approached me with open arms, and a most divine and heavenly smile upon his countenance. As He advanced towards me, I felt that his very looks spoke, and said, "Thy prayer is accepted, I own thy name." From that day to the present I have never entertained a doubt of the manifestation of his love to my soul.⁶⁾

彼女はついに、「求める者は見いださん」という聖書のルカ伝の言葉どおり、イエス・キリストとの出会いを果たすのである。そして、その人物から「汝の祈りは受け入れらん」と告げられたと感じる。彼女はその時から、「私の魂に対する神の愛の現れ」に疑いを抱いたことはないと言っている。次の引用は、その後間もなくして再び起こった幻視体験を述べた部分である。

As I was milking the cow and singing, I turned my head, and saw a tall figure approaching, who came and stood by me. He had long hair, which parted in the front and came down on his shoulders; he wore a long

white robe down on his feet; and as he stood with open arms smiled upon me, he disappeared.⁷⁾

彼女が歌を歌いながら乳搾りをしていると、再びその人物が現れる。その人物は、今度はもっと具体的な姿形をしており、頭の真ん中で分けた長い髪を肩まで垂らし、裾までたれるゆったりした白い衣服を纏っていた。彼女はその姿を見て、彼女のもとに現れた人物が、紛れもなくイエス・キリストであったことを確信するのである。それから、彼女は十八歳の時にメソジスト・エピスコパル会⁸⁾に入会し、その六ヶ月後、改宗している。

ジュリア・A・J・フートは、三人の中で最も頻繁に、しかもストーリー性に満ちた幻視体験をした人物である。彼女は14歳の時、アフリカン・メソジスト⁹⁾に改宗しているが、自分に「悔い改め」の瞬間がいつ訪れたのかははっきりしないと述べている。彼女の場合は、天使の来訪によって「義認」を受け、福音を説く者として選ばれた者であると告げられるのだが、彼女はそれがサタンの誘惑ではないかという疑心に苛まれ、葛藤する。その苦しみの果ての祈りの中で、終にまた同じ天使が現れ、彼女をイエス・キリストのもとへ誘っていく。次に示すのは、そのシーンの引用である。

... while engage in fervent prayer, the same supernatural presence came to me once more, took me by the hand... He then lead me... till we came to the place where was great quantity of water, which was silver... My hand was given to Christ, who led me into the water and stripped me of my clothing, which at once vanished from sight. Christ then appeared to wash me, the water feeling quite warm... Then God the Father said to me, "You are now prepared, and must go where I have command you."¹⁰⁾

天使に誘われ水辺にやってきた彼女は、キリストの手に導かれ水の中に入り、

衣服を剥がれる。彼女はその水は温かく、まるでキリストが自分の体を洗ってくれたようだったと記している。これは正に浸礼の儀式であると言えよう。そして、彼女は父なる神から、「汝の準備は整えられた、お前に命じた所へ行かなければならない」と告げられる。神の恩寵に包まれ、彼女の「是認」は完了するのである。

このようにして、彼女たちはそれぞれの運命の中で、自己の魂の「救済」を獲得し、次の段階へ向かうことになる。だが、既に述べたように、彼女たちはその過程で、女性であることから生じる障壁に直面することになる。ここからは、彼女たちがラジカルな活動家へと成長して行く過程に焦点を当て、見ていくことにする。

二十五歳の頃にフィラデルフィアに移ったジャリーナ・リーは、そこでメソジストの黒人指導者、リチャード・アレン¹¹⁾に師事し、信仰を深めていく。「説教せよ」と告げる神の声に答えようと決意した彼女は、自分が体験した不思議な出来事は伏せたまま、アレンに説教壇に立たせてほしいと願い出る。だが、彼は彼女が祈りの集会を開くことは認めるが、女性が説教者になることは彼の教義に反するとして、その願いを聞き入れなかった。このことに関して、彼女は自伝の中で次のように記している。

For as unseemly as it may appear now-a-days for a woman to preach, it should be remembered that nothing is impossible with God. And why should it be thought impossible, heterodox, or improper for a woman to preach? seeing the Saviour died for the woman as well as for the man.¹²⁾

彼女は、「当節、女性が説教するのは相応しくないようだというのなら、神に関しては何事も不可能はないということを思い出すべきである。・・・救い主は男性の為だけではなく、女性の為にもお亡くなりになった・・・」と述べている。彼女は女性の位置づけを、世俗の世界ではなく、神との関係において捉え、神の下では男女は平等であると主張している。その後、女性は地方の教会

の牧師であった人物と結婚し、フィラデルフィアを離れることになる。夫は聖職者であったにもかかわらず、彼女の宗教活動には否定的であった。彼女は見知らぬ土地と信仰上のストレスから体を害し、しかも、六年間で夫を含め六人の家族を失うという不幸に見舞われる。その後、フィラデルフィアに戻り、リチャード・アレンから説教をすることを許された彼女は、残された二人の幼児を親戚に預け、伝道の旅を開始することになる。

彼女の旅は、時には徒歩で、16マイルの道を行くこともあったという。彼女の自伝を見ると、当時の布教活動がどの様にして行われ、いかに活気に満ちたものであったかが伺われる。東海岸からイリノイ州、オハイオ州に至るジャリーナ・リーの布教の旅は、四十歳を越える頃には2,325マイルに達していた。自伝には、次のようなエピソードも記されている。ある時、興味本位でやってきた、残酷なことで知られるある奴隷所有者が、彼女の説教を聞いた後、彼女に手を差し伸べ握手を求めた。その人物は彼女の説教を聞き、「黒人にも魂があることを認めたようだ」と彼女は記している。

勇敢にも保守的な教会の性差別に挑み、アフリカン・メソジスト・教会で最初の女性説教者となったジャリーナ・リーは、このようにして、神の福音を説いて回り、多くの白人と黒人を改宗させた。だが、彼女は生涯を通して徐階を受けた聖職者になることはなく、あくまでも民間の説教者であり続けねばならなかった。自伝の出版から13年後、同じく旅の費用を捻出するために書かれた『ミセス・ジャリーナ・リーの信仰体験と旅日誌』も、「教会における性差別主義に異議を唱えるものである」ということで、教会からの出版が認められず、自費出版された。この出来事は、伝道者としての彼女の生涯を象徴しているように思える。

ジルファ・エローは、ジャリーナ・リーとは異なり、聖職者として伝道することを許された人物である。だが、彼女はその前に彼女の信仰に反対する夫と闘わねばならなかった。彼女は十六歳の時に結婚し、一人娘をもうけている。彼女の夫は、真っ当な人物であったが、信仰心は全くなく、常に彼女に信仰を捨てるようにと説得した。結局、夫はその説得に失敗するのだが、彼女は神の

声に応えられない自分の弱さに苦しみ、度々重い病に罹っている。自伝『思い出の記』は、宗教的幻想、神のお告げ、幻夢、神の命等に満ちているが、そうした超自然的な体験は、こうした病の回復期に訪れたものである。そうした中、彼女は自分の人生を決定づける宗教体験をする。夢の中に現れた天使によって、彼女は野外集会に参加せよと告げられるのである。その声に応え参加した野外集会で、彼女は「眼には見えないが、神に遣わされた神々しい人物」から、「説教せよ」と促される。集会の主催者である牧師とその教会の許可を得、説教壇に立った彼女は、聴衆に強い靈感を与える説教をし、終に自分の使命を確信するのである。彼女はそのことを次のように記している。

Our dear ministers stood gazing and listening with wonder and astonishment; and the tears flowed abundantly down their cheeks while they witnessed the wonderful works of God. After I had finished my exhortation, I sat down and closed my eyes; and there appeared the light shining round about me as well as within me, above the brightness of the sun; and out of that light, the same identical voice which had spoken to me on the bed of sickness many months before, spoke again to me on the camp ground, and said, "Now thou knowest the will of God concerning thee; thou must preach the gospel; and thou must travel far and wide."¹³⁾

「自分の力ではなく、神の素晴らしい業」によって、聖職者たちを驚愕させ、感動させた彼女は、その説教を終えた後、再び前述の人物からの声を聞く。「今、お前はお前に対する神の意思を知った。お前は福音を説かねばならない。そして、遠く広く旅をしなければならない」と。

その後、エローは病に罹った夫に代わり、きつい労働をして家族を支えることになる。夫の死後、彼女は黒人の子供のための学校を開き、教師となるが、その間も、神からの伝達は続く。終に、彼女は苦慮の末、娘を親戚に預け、伝

道の旅を開始するのである。彼女の旅は東海岸地帯から始まり、勇敢にも奴隷州であったバージニアやメリーランドに、そしてワシントン・D. C. に及んでいる。常に捕らえられ、奴隷として売られるかも知れない恐怖に苛まれながらも、彼女の旅は続いた。自由黒人で女性の聖職者が神の言葉を説くということで、彼女の行く先々には、黒人、白人、男女の別を問わず、多くの人々が集まったという。1873年、彼女は再び「眼を見張るような幻視」を見る。そこで、「遠く海を渡って神のメッセージを伝えよ」という声を聞く。それから三年後、彼女はロンドンに渡り、そこで5年間を過ごした。その間、彼女は多くの国を回り、多くの友人を作り、千回を超える説教をしたという。彼女の自伝はそこで閉じられているため、その後の人生に関しては不明である。

ジュリア・A・J・フートも又、信仰に無理解な夫と、女性を差別する教会制度と闘い、伝道者となった。彼女は18歳の時、船員であった人物と結婚し、ボストンに移住している。彼女はそこでアフリカン・メソジスト・エピスコパル・シオン教会¹⁴⁾に入り、救済の不思議を訴え始める。それに猛反対する夫の脅しに屈することなく、彼女は家庭で開く集会を活発に行い、説教者としての道を進んでいくのである。やがて、彼女を信奉する女性信者たちが、彼女を説教壇に立たせる運動を起こすに至る。ボストンの教区の責任者はそれに反対し、彼女の教会はおろか、ボストンでの一切の布教活動を禁じてしまう。この出来事に関して、自伝の中で彼女は次のように語っている。

I had never asked for his pulpit, but had told him and others, repeatedly, that I did not care where I stood—any corner of the hall would do. To which Mr. Beman had answered: “You cannot have any place in the hall.” Then I said: “I’ll preach in a private house.” He answered me: “No, not in this place; I am stationed over all Boston.”¹⁵⁾

フートが求めたのは、教会の中で話す機会を与えられることで、決して説教壇に立つことではなかった。そして、彼女は、この教会の理不尽な扱いに対し、

自分の家で集会を開くことで応えたため、分離派であると告発されることになる。告発を受けた彼女は、教会の上層部に嘆願するが、それは無視された。

My letter was slightly noticed, and then thrown under the table. Why should they notice it? It was only the grievance of a woman, and there was no justice meted out to woman in those days. Even ministers of Christ did not feel that woman had any rights which they were bound to respect.¹⁶⁾

引用にあるように、フートはその出来事を、「あの頃は女性に与えられる公正さなどはなかった。キリスト教の聖職者でさえ、彼らが尊重すべきものであるいかなる権利も、女性にはないと思っていた」と述懐している。

ボストンでの布教を禁じられた彼女は、思いを同じくする女性たちとフィラデルフィアで非公式な集会を開いたのを皮切りに、アフリカン・メソジスト・エписコパル教会の聖職者と共に、また彼らに招かれて、各地で活発な布教活動を展開していくことになる。1850年には、アレゲーニー山脈を越え、オハイオ、デトロイト、カナダで説教をした。彼女は二十八歳の時、クリーブランドに定住するのだが、その前後に父親、母親、夫を亡くし、自分も喉を傷め、声が出なくなるなど、相次ぐ不幸に見舞われている。その後、声を取り戻し、伝道の旅を再会するが、後の二十年間、彼女がクリーブランドでどのような生活を送っていたかは、伝記にも記されていず、不明である。だが、彼女が1870年代初めに中西部で巻き起こった「神聖復活運動」(Holiness Revival)に加わっていたことは、分かっている。

フートが自伝『火から取り出した燃えさし』を出版したのは五十六歳の時であったが、その後の人生も又不明とされている。だが、その間のどこかの時点で、彼女はアフリカン・メソジスト・エписコパル・シオン教会から、女性としては初めての執事の、七十七歳で亡くなる前には、長老の階位を授けられたということだ。女性としてこのような高位についたのは、その教会では彼女が

初めてであった。

(4)

以上、ジャリーナ・リー、ジルファ・エロー、そしてジュリア・A・J・フートの三人の黒人女性伝道者の生涯を、彼女たちが信仰を通じて自己実現を果たしていく過程を辿りながら見てきた。若くして自己の魂の救済を獲得した彼女たちは、結婚により、妻となり母親となって、伝統的な女性の生きかたを踏襲する。だが、彼女たちは、最終的には、両者を生きるよりは、神の子となる道を選び取った。聖書の文言と自らの強烈な信仰体験から生まれた信念のみを支えとし、孤独と闘いながら、当時の世俗と宗教界の人種及び女性差別に果敢に挑戦していった。結果、彼女たちは、自力で桁外れな人生を手に入れることになるのである。そういう意味で、彼女たちはもとより、最初に列挙した自伝の著者たち、そして歴史に即席を残さなかった数知れない女性伝道者たちは、19世紀アメリカのキリスト教世界に誕生した、真正のフェミニストであったと言えるだろう。

* 本論は、平成12年7月に行われた黒人研究会東京例会における発表に加筆訂正したものである。

注釈

- 1) Harriet Beecher Stowe, "Sojourner Truth, the Libyan Sibyl" (*The Atlantic Monthly*, 1863).

トゥルースがハリエット・ビーチャー・ストーの家に逗留した時の出来事を綴ったもの。その中にはトゥルースの人物像や彼女がそこで語った体験等が描かれている。因みに、サジャナー・トゥルース（真実の一時逗留者の意）という名前は、彼女が自分で付けたもので、本名は Isabella Van Wagener。

- 2) このタイトルは、旧約聖書ゼカリア書3章2節の「これは火から取り出した燃え

さしではないか」から取られたもの。ジュリア・A・J・フートは幼い頃から事故や病等で、生命の危機に晒される体験を何度かするが、助かっている。このタイトルはそれに由来しているものと思われる。

- 3) Jarena Lee, *Life and Religious Experience*. Edited by William L. Andrews, *SISTERS OF THE SPIRIT: Three Black Women's Autobiography of the Nineteenth Century* (Bloomington: Indiana University Press, 1986), p. 27.
- 4) the Bethel African Methodist Episcopal (BAME) Church:
1794年に創設されたメソジスト派で初めての黒人教会。
- 5) Jarena Lee, "My Call to Preach the Gospel" in *Life and Religious Experience*. *SISTERS OF THE SPIRIT*, p. 37.
- 6) Jilpha Elaw, *Memoirs*. Ibid., p. 56.
- 7) Ibid., p. 56.
- 8) the Methodist Episcopal (ME) Church:
1784に設立されたアメリカで初めてのメソジスト教会。その後、1939年には the Methodist Church, 1968年には the United Methodist Church となった。
- 9) the Methodist Episcopal Society: 黒人のメソジスト派の団体。1816年に ME Church より独立して設立された the African Methodist Episcopal Church の全身。
- 10) Julia A. J. Foote, "Heavenly Visitations Again" in *A Brand Plucked from the Fire*. *SISTERS OF THE SPIRIT*, pp. 202-203.
- 11) Richard Allen (1760-1831). ME Church で黒人としては初めて徐階（執事）を授けられた、メソジストの黒人指導者。後に黒人信者に対する ME Church の人種差別から、独立した黒人教会、BAME Church が設立されるが、その設立者の一人となった。
- 12) Jarena Lee, "My Call to Preach the Gospel." *SISTERS OF SPIRIT*, p. 36.
- 13) Zilpha Elaw, *Memoirs*. *SISTER OF THE SPIRIT*, p. 82.
- 14) the African Methodist Episcopal Zion Church: 1862年に ME Church より独立した黒人教会。
- 15) Julia A. J. Foot, *A Brand Plucked from the Fire*. *SISTER OF THE SPIRIT*, p. 206.
- 16) Ibid., p. 207.